

第33回アクラスZOOM寺子屋 感想

嶋田先生 桜井先生

大変有意義で、楽しい時間をいただきました。

ありがとうございます。

何年も前に東京外大で行われたDLAの講習会を受講し、4技能別のスケールを学び長い間教材とともに実践してまいりましたが、今回のものさしは多角的に対象者を判断するという観点と今後何をすべきかが個々の指導者目線ではなく共有できるので大変使いやすく、ありがたい指標です。正規の教員の日本語指導教員が何をしてほしいかを提示してきますが、漢字のかなふりや宿題の手伝いなどなんとももどかしい授業時間が多いうようです。このような明確な物差しがあると教員にも一緒に学びましょうが言いやすいですね。

大変貴重な時間ありがとうございました。

この何年か、櫻井千穂さんから学んできたことはとても大きい。それがまた、「ものさし」によって、さらに大きなものになっている。同時にそれは単に「学ぶ」ことでは終わらない。そこで受け止めたことを、どう、自分の足元から、1mm1mm、社会の中に実装するのか、実践するのかというテーマとしてある。

そして、そのフィールドはやはり「学校」である。では、「日本語教師」である私は、また、地域日本語教室の実践者としての私は、その学校とどう関係を構築できるのか、構築すべきなのか、はたまたできないのか。考え続けている。「ものさし」後半の、各地の学校の実践例は本当にすばらしいもので、目先の学校のダメさを嘆いてはダメだと思う。

学校も閉鎖空間ではない。外に、社会に開かれることが求められている場もある。そこで、自分達はどういうものであることができるのか、それを「場」として「仕組み」として、社会の中の実践形態として日々の活動から紡いでいかなければならないと考えている。

地域において子供にどうかかわるかを示すことによって、学校教師との信頼関係を構築したいと考えている。

本日は参加させていただき、ありがとうございました。子どもの支援に関わっていない立場で貴重な席をいただきてしまい申し訳ない思いがありました。子どもの支援について知るにあたって、最初にこのようなすばらしい実践例を拝見することができたことは非常にありがとうございました。非常に丁寧に、あたたかく、注意深く、あらゆる方向から子どもとその発達を捉えていくのだということを感じました。

やり取りをしながら思考力を伸ばしていく、その子どもの持つ力と可能性を探っていくところは、地域日本語教育においての、さまざまなものその想いや考えを聞こうとすること、話そうとすることで表現力を伸ばしていくという部分に通じるものがあると思いました。

子どもと大人の支援の違う部分は大きいと思いますが、その人自身を総合的に見て、向き合っていく姿勢が必要であるという点には共通するものがあると思いました。

以前お目にかかったときにも申しましたが、支援している子どもが「休み時間は透明人間と話して」と私に言ったときのショックは忘れられません。週に1~2時間の支援で自分にできることは何だろうと考えたとき、やはり日本語を教えるというよりは、先生や友達との「橋渡し」なんだろうなと常に思っています。今日櫻井先生がおっしゃったように、褒めることで自分の良いところをメタ認知させ、さらに伸ばすように促すというのは、ぜひとも日本人外国人関係なく積極的に取り入れたいと思いました。

ことばのものさしについての理解がより深まっただけでなく、色々な気づきがあって本当に有意義な時間でした。ありがとうございました。

本講座を通して、子どもに向き合う姿勢そのものを改めて考えさせられました。櫻井先生の「日本語を教えることが目的ではなく、その子が育つことが目的である」という言葉は、児童の日本語指導に關わる上での根本的な視点を示すものであり、深く心に残りました。櫻井先生ご自身が、児童の心に寄り添いながら対話していらっしゃるお姿や、今回のお話の端々からその姿勢が伝わり、同時に心を開き、全力で向き合おうとする児童の姿から多くのことを学びました。

指導する側の善意が、時に子どもにとっては負担やプレッシャーとなり得ることを自覚し、支援者としての立ち位置を見直す必要性を強く感じました。

また、子どもの力を「できる・できない」という点で捉えるのではなく、複数の側面から立体的に捉えることの重要性について、具体的でわかりやすく説明していただきました。子どもは日本語を使いながら力を伸ばしていく存在であり、読めない・書けない状態は決して特別なことではないという過程を踏まえ、日本語を用いて考える力を育てていくことが、子どもの成長を支える上で不可欠であると理解しました。

子どもたちの成長は非常に早く、支援に關わる中で、焦りが先立ってしまうことも少なくありません。しかし今回の講座を通して、DLAを学び続けることの意義を改めて認識するとともに、私自身も知識と視点を深め、子どもたちを適切に支え、助けられる人になりたいと強く感じました。

本講座で得た学びを、今後の実践や周囲との共有に生かしていきたいと思います。このような貴重な学びの場を提供してくださった嶋田先生、櫻井先生に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

貴重な学びの機会をいただきありがとうございました。

子どもの支援で何かできないかと数年前から少しづつ学んできましたが、一歩踏み出せずにいました。

今回ケンさんのビデオを見て課題文章を読んでいたときには見えなかったケンさんが「立体」で現れてきました。さらに、それをどのように捉えられるのかの説明を聞いて「ああ、こういうことなんだ」と「子どもを立体でとらえる」ことの意味がよくわかりました。

そのうえで、気をつけたいと感じたことは「加害者になりやすい」です。できないプレッシャーを与えないことです。そして、「日本語を使っていく中で健やかに育つことが大事」、「内容がともなった思考を育てる」を肝に銘じて、頭を思いきり使って戦略的に何をしたらいいかを考えていきたいと思いました。

今子どもの支援への漠然とした怖さがほつれてきた感じがしています。実践をスタートさせてみたいと決意したところです。

とても学びの多い研修でした。

事前課題として与えられた情報の中から、どこをどう読み取ればよいのか、自分の頭であれこれ考えた上で、櫻井先生の見立てを聞かせていただくことで、どのような視点から情報を分析すればよいのか、具体的に学ぶことができました。

また、櫻井先生がDLAをなさっている様子を動画で見せていただきながら、なぜ次にこのような質問をしたのか、なぜこのレベルの本を提示したのかを解説していただくことで、DLAの流れ、そしてテスターとしての在り方についても理解を深めることができました。

私は初めてDLAの動画を見たのですが、導入からの流れやレベルを探る様子がOPIと似ているなあと思っていたのですが、質疑応答で、櫻井先生とOPIとの関係を伺うことができて、そうだったのかと合点がいきました。

また、発達のステージについてもうまく捉えられていなかったのですが、発達ステージのEやFは、OPIの上級の箱のイメージ？！なのでは？と連想することで、なんとなくレベル感がつかめてきたような気がしました（間違っているかもしれません）

今後はDLAについてきちんと学び、子どもを見立てる力を身につけて、現場における自分の支援のあり方を振り返るとともに、他の支援者や保護者とも子どもに必要な支援について認識を共有したり、話し合ったりできるツールとして活用していきたいと考えています。

ありがとうございました。

とても内容凝縮の充実した2時間でした。

画面越しですが、初めてお会いする櫻井先生。明るくてパワフルかつ、明瞭な話し方にすっかり魅了されてしまいました。

前半一時間は、メモする時間もないくらいのスピードで、学びがとても多かったです。

その中で、一番響いたことは「読みの世界」です。「読みの世界に入ってない」という櫻井先生のお言葉で、私が日々悩んでいたことが解消されました。何で気づかなかつたんだ！？と思う反面、彼らを「読みの世界」に誘うための多読を充実させることを学べました。

「評価を立体的に見る」こと、「ななめ方向の支援」と「たて方向の支援」、どちらが合うかの見極めなども本当にすべてが貴重な学びでした。

後半、ケン君のDLA。櫻井先生の温かい雰囲気で、ケン君が心を開いていることが伝わってきました。初対面でないこと、自分をわかってくれている先生との関係だからこそその評価の時間だったと思いました。初対面では難しいかなと。評価の最後に「メタを」とおっしゃっていたことも学びました。最初から最後まで本当に貴重な動画でした。

私自身、岡山県で財団の委託事業で塾で外国ルーツの子どもを教えて3年になります。留学生と大きくことなるのは、自分で望んで来日していないことだと感じることが多々あります。また、第一言語の確立もしていないこと、学校生活が本当に日々激流の川のような速さで過ぎていくなかで、小石を拾うようなサバイバルをしている子どもたちだということです。多感な年ごろで、反抗期が来たり、自身の感情にとまどい姿もみてきました。また、親が日本語が話せず、ヤングケアラーになっている姿もみました。

ケン君の話をされていた時に櫻井先生が胸が詰まるような涙ぐまれていた時、私の涙腺も危なかったです。

たくさんの子どもが、年齢や時期を問わず来日する人数が激増していて、4月からはDLA評価の業務に携わりたく、今回受講させていただきました。しっかりとDLAを学ばなければならぬと思いました。

本当に貴重な時間をありがとうございました。

「ことばの力のものさし」について、ガイドは読んでいましたが、ほんやりとしかわかつていなかつたものが、櫻井先生のお話を聞いて、よく理解できました。「ことばの力のものさし」の開発についての意図や、DLAの録画動画を見ながら、櫻井先生の発話や進め方の意図をお聞きできたのもとてもよかったですし、嶋田先生もおっしゃっていましたが、生徒への接し方、気づきを促す声かけなども、とても参考になりました。今回、参加できてとてもよかったです。ありがとうございました。より多くの先生方に聞いていただきたい内容だと思いました。

私は普段、日本語学校において成人した学生相手に日本語を指導しているのですが、今回のお話で「点ではなく、立体的にみる」ことをもう少し意識したいなど改めて感じました。

評価についても（認定申請に向けて）再度検討している最中だったのですが、このセミナー、特に櫻井先生とケンさんとの動画を通して「何のために評価するのか？」がいかに大切か思い知らされた気がします。もちろん参考枠にもヒントはたくさんあるのですが、根底にある「社会的存在として捉える」「言語を使ってできることに注目する」「多様な日本語使用を尊重する」は共通なんだと思います。成人した学生であっても、ステージに伸びしろがあるはずで、特に母国を離れて異文化の中に飛び込んだ彼らは日々急成長しているし、そんなクラスメイトや先輩に囲まれている環境での日本語学校での2年は本当に貴重な時間なんだと感じました。

日本語学校がルーツのある子どもたちに何ができるのか、地域の小中学校との交流を通して、また留学生たちがこれからルーツのある子どもの保護者になる可能性も考えて、日々の仕事に携わっていけたらと思います。

今回20年ぶりに櫻井先生とつながることができ、学びの多い時間となりました。貴重な機会を与えてくださった嶋田先生、本当にありがとうございました！！（「できる日本語」を通してつながりが広がっていくことをここ数年実感しています）

大変有意義な研修をどうもありがとうございました。お忙しい中お時間を割いてご準備・ご講義くださった櫻井先生に心より感謝申し上げます。

「ことばの力のものさし」を現場で活用したいと思いながらも、DLAからどのようにものさしに落とし込めばよいのかを具体的に知りたいと思って参加いたしました。今回の研修で「ものさし」を作成された櫻井先生から直接説明を受けることで、「子どもの力を立体的に捉える」ということがどういうことか、くっきりと理解できたように感じています。また「読みの世界に入る」という言葉も非常に腑に落ちるキーワードでした。現場で経験的に感じること、実践を通して得られる見取りを「ものさし」を活用することで検討し、可視化し、さらに実践に還元していく、というプロセスが理解できました。さらにそれを協働で実践・連携するためにも役に立つツールだとも感じました。

私は2年前から散在地域の小学校で日本語支援をしています。まだまだ学校の理解は20年前と同じ・・と思う所からのスタートでした。櫻井先生のご発言にあったように「笑顔で乗り込む」ことを心がけているものの、いまだ「3人仲間を作る」どころか毎回玉砕もしくは透明人間になった気持ちで帰路につくこともあります。でも、今回の講義を受けて、対象児童がクラスの中で周縁化されてしまっている状況に気づき声を上げ、アクションを起こすのはやはり意味のあることなのだ、と改めて力をいたいだいたい気がしています。本当にありがとうございました。

途中からの参加、そして途中退室してしまい申し訳ございませんでした。実は櫻井先生、私が住んでいる茨城県古河市の日本語指導サポーター研修に一度講義していただいたことがあります、またお話を聞くことができて、当時のことを思い出し・・・というか、すっかり先生のお話や子供たちに向ける姿勢を忘れていたことを反省いたしました。今回の講義であらためて考えようと思ったことは「ななめ方向からの支援」「たて方向の支援」のお話でした。私は現在、中学生の取り出し授業をしていますが、どうしても日々の行事やテスト、高校進学と目の前のことだけにしか目を向けておらず、「伸ばす」ことを後回しにしていました。（結局今日もそうでしたが）これから具体的にどうやって「伸ばす」かはまだ考えがまとまっていますが「読む」ことに少し重きを置いて支援していくこうと思いました。櫻井先生の「どうしてそこまでわかったの？すごいなあ！！」のお言葉、聞いているだけで涙がでてきました。私も寄り添って、子供たちの能力を「伸ばす」ことができるようと考えていきたいです。ありがとうございました。

日本の小学校・中学校は、外国籍住民の義務教育を認めていないのに、海外から転入する児童生徒に対しても日本人と同じ内容の教育を強いていると思われます。しかし、保護者の意向等で来日した子どもにとって、日本語を学び、学校の授業が少しでも理解できるようになるかどうかは、運命の扉を開けられるかどうかと言えるほど の出来事でしょう。さらに、高校進学は海外ルーツの子どものキャリアにも大きく関わります。

2025年4月に公開された「ことばの発達と習得のものさし」を知り、使い、児童生徒の支援に役立つお話を伺えて、「学習を支える評価」をするためにたいへん参考になりました。

年少者にとっては「話す・聞く」が重要だけれど、中学生・高校生にとっては「読む・書く」ということが、教科の内容を理解するためにも、そして将来の進路を決めるためにも、とても大切だということもわかりました。対面のアセスメントだけでなく、「読む」「書く」の実例も見せていただき、子どもの背景を考える多くのヒントもいただきました。

外国人散在地域では、海外ルーツの子どもを支援する市民グループが教育委員会や学校が積極的に指導しようとしている子どもたちの伴走をしています。学齢超過で来日した子どもをなんとか高校に入れるために学習支援をする中でも、日本語がわからないだけで、考える力や教科の知識はある子どもにも直面しています。「学習を支える評価」、子どもの力を上に、斜めに伸ばすための学習ができるように、考えていきたいと思いました。

櫻井先生のお話、どのように支援しているかのビデオ映像、大変貴重なものをお見せくださいまして大変感謝しております。多読の良さ、再確認です！！私も多読、導入したいと思います！！ありがとうございました！！

櫻井先生、お忙しい中「ことばの力のものさし」について貴重なお話をいただけたこと、本当にありがとうございました。これまで「ことばの力のものさし」の中に書かれていることを読み取ろうと必死に勉強してきましたが、今日の2時間で「その子どもの背景情報からさまざまな面を想定して、その根拠を探して子どもの力を立体的にみとる」ということが、どういうことなのかが整理されたように感じました。また、「多読」の大切さを「毎日やっていればお箸を使えるようにできるようになる」とおっしゃっていたのが印象に残りました。現在、係わっている子ども日本語教室では絵本を読む活動を進めていますが、これからは読むことが嫌にならない工夫をして、「多読」の活動を習慣化できたらと思いました。今後は子ども日本語教室と学校との連携を目標に、仲間づくりをしていくつもりですが、その場で「ことばの力のものさし」が子どもを語るための共通言語の一つにならいいなあと感じました。本当にありがとうございました。

大人と子どもの言語習得は大人とは違うことを改めて実感しました。これから子どもの日本語クラスを立ち上げる計画を立てている段階で、このセミナーを受講できることは意義深いものでした。子どもの言語能力を一方的でとらえるのではなく、立体的に見る視線は、今後のクラスを設計していくうえで、大きな指針になると感じています。また、母語に培われてきた子どもの能力にも目を向けることは今まで考えていませんでした。認知発達、学習を支える言語としてかかわっていくことが大切であることを学びました。一緒に新し子どもクラスを運営していく仲間にも「ことばの力のものさし」を読んでもらいたいと思いました。
非常に有意義な時間でした。ありがとうございました。

今回の研修では、ビデオを視聴しながら「どのように見立てるのか」という視点について具体的に解説していただき、かなり実践的だと感じました。単に事例を見るのではなく、どこに着目し、どのように意味づけていくのかを示して下さったため、日頃の自分の見取りと重ねて、振り返る機会となりました。
また、「ことばの力のものさし」の解釈についても、チェックリスト的に当てはめるのではなく、実践者自身がどのような視点で子どもの姿を捉えるかが重要であるがわかりました。今後は、のさしを手がかりしながら、自身の見取りの視点に意識的になり、立体的に捉える力を養っていきたいと思います。

この度は研修会に参加させていただき、どうもありがとうございました。「多文化多言語の子どもの教育」は、母語の力のある留学生に教える場合との違うということを明確に学ばせていただきました。さらに、国によっては生活言語と公用語、教育を受ける言語、それぞれが別であり、どれもが頼り切れない状態で、日本語を学ぶ子どもも多かろうと思います。彼らにとって、二つ目、三つ目、四つ目になろう日本語を、たて方向、ななめ方向の支援と「立体的」に見て、子ども、一人一人のスタート地点を見極め、それぞれに合った方法の選択することの重要性を認識致しました。また、事前課題の細かい解説や、加えて実践の評価場面といった、大変貴重な体験もさせていただきました。

自分の授業を振り返り、見ずに来てしまった部分を反省して、今後に生かせるように努めたいと思っております。このような貴重な機会をいただきまして、どうもありがとうございました。

今回の「ZOOM寺子屋」は、現場でのジレンマの正体が明確になり、自らの指導方針を再定義する貴重な機会となりました。

特に、子どもの能力を「点」ではなく「立体的」に捉える重要性を学び、「日本語ができない子ども」ではなく「複数のことばと文化を持つ可能性のある子ども」として向き合うことの大切さを痛感いたしました。理論という強固な「背骨」を持つことで、自治体の枠組みや既存の教材に縛られすぎることなく、一人ひとりの実態に即した支援を目指す決意が固りました。

また、教科学習言語を支えるための日本語指導を考え、この視点を学校現場の先生方や地域の日本語教師の皆様とも共有し、輪を広げていきたいと思います。素晴らしい学びの機会をありがとうございました。

「ことばの発達と習得のものさし」の活用方法について詳しくお話を伺うことができ、大変勉強になりました。事前課題に取り組んだ際、提示された作文の情報のみで「書く」以外の部分をどのようにものさしで考えれば良いのか難しく感じました。しかし、寺子屋のご講義で解説を伺い、子どものさまざまな部分から考えていくのだと納得でき、多角的に子どもたちを見ていくことの大切さを今まで以上に実感できました。DLAとのちがいについても理解でき、今後の活用や子どもを支える関係者で共有し皆で見ていくという意識がより明確になりました。今回参加できてよかったです。ご講義、誠にありがとうございました。

(大変申し訳ありません。提出締切が過ぎてしましましたが、お送りさせてください。)

「ことばのものさし」の考え方にある「4技能のうち、もっとも高い力を見極め、高い力を活用して学習課題に取り組むことで他の力を効果的に伸ばす」ことを実践したいと考えています。具体的にどのように判断してどのように支援していくべきか、という点を学びたく、今回の講座を受講させていただきました。

今回、「ケンさん」という実例で考えることができ、しかも、DLAの様子も拝見することができ、かなり具体的に考えることができたと思います。とはいっても、事前課題を考えた段階では、自分はまだ見方が甘かったということも実感しました。他の方の評価（判定）、その根拠を拝見して、自分が捉えきれていた点に気づき、そして、どこを、どのように判断すべきなのかという点を学ぶことができました。

現在、小学一年生男子児童を担当しています。カナダにルーツのある児童です。

「話す」はかなりできるけれどその次の段階「読み」までかなり隔たりがあり
どのように支援をしたらいいのか悩んでいました。

もう一度、「ことばのものさし」を使って彼のことばの包括的な力を考えたいと思います。

ちょっとした助けでできることをもっともっと見つけ、そのための活動を考えていきたい、そのためには「ことばのものさし」実践例も読み込んで、もっと勉強していきたいと思います。

「言葉は生きていくためのもの」「4技能を立体でとらえる」「持っている力をすべて認める」常に心に留めておかなければ！とあらためて思いました。たくさんの学びをありがとうございました。

「ことばの力のものさし」を今回初めて知りましたが、事前課題と櫻井先生のわかりやすい解説で考え方を理解することができました。子どもと大人の第二言語習得の違いをもとに様々な背景を持つ子どもの適切な評価と個々に合わせた日本語力向上のステップを考えることが重要とわかりました。外国にルーツを持つ子どもが増えつつある今、学校教育の中でいかに教科学習につなげていくかが課題ですので今後も支援のあり方を探っていきたいと思います。本日はありがとうございました。

現在日本語別科で仕事をしていますので直接児童生徒と関わることはないのですが、平面で評価せずに立体で考えるという視点がとても新鮮でした。また、読みの大切さについても実感しました。今後、新しいカリキュラムを考えていく上でとても参考になりました。本当にありがとうございました。

櫻井先生

このたびは、たいへん有意義な講義をありがとうございました。東京都葛飾区で5年前から外国ルーツの児童・生徒の日本語支援ボランティアをしています。子どもたちの興味を引くような遊びを取り入れた日本語学習など、工夫してきたつもりでしたが、ことばの「習得ステップ」ばかりに目が向き、「発達ステージ」への意識が希薄だったことに気付かされました。今後は、子どもを「立体的」に見ること、ZPD領域を見定めて「ななめ方向」への支援をデザインすることを心掛けたいと思います。実際の評価の場面をビデオで拝見できたことは、とても貴重な体験でした。また、事前課題の分析なども、大変参考になりました。お忙しい中、素晴らしい学びの機会を与えてください、本当にありがとうございました。

この度は、貴重なお話をありがとうございました。

今回のお話は、子どもの言語発達をテーマとしながら、私自身が地域で取り組んでいる「ともに生きるまちづくりと日本語教育」の実践に深く重なる内容でした。私は留学生への日本語教育に携わる一方で、地域では高齢者、子ども支援、障がい当事者、LGBTQの方々など、多様な背景を持つ人々とともに共生をテーマに活動しています。その中で、日本語を母語としない子どもたちが、母語を大切にしながら日本社会の中で力を発揮していくにはどうしたらよいのか、また学校教育と地域がどのように協働できるのかを常に考えてきました。

今回のお話で印象的だったのは、「日本語を教えること」自体が目的ではなく、日本語を通して子どもの思考や発達、生きる力を支えるという視点でした。「ことばの力のものさし」が、チェックリストのようにできることを数えるものではなく、子どもの背景や経験、母語を含めた言語全体の力を統合的に見て、未来の支援につなげるための枠組みであるという説明は、私が取り組む地域活動と深く通じると感じました。言語を単独で評価するのではなく、その人の生活や関係性の中で捉える姿勢に強く共感しました。

映像事例では、日常会話は流暢であっても、読みの世界に十分に入れていないことが学びの壁になっている様子が見て取れました。同時に、経験をもとに考えたり、登場人物の気持ちを深く理解したりする力が確かに存在していることが丁寧に見出されました。「できない部分」を補うのではなく、「すでに持っている力」を足場にして次の学びへつなぐという考え方には、学校だけでなく地域の場にも通じるものだと感じました。

地域の活動の中では、学校の外だからこそ子どもや若者が自分のことばや経験を安心して出せる場が生まれることがあります。今回語られた「安全地帯をつくる」「言語レパートリー全体を認める」という視点は、まさに地域が担える役割であり、そこから得た経験や語彙、自己理解が再び学校での学びにつながっていく循環を、学校と地域がともに考える必要があると改めて感じました。ただ、地域では、日本語ができることが大前提といった部分もあり、課題は山積みだと感じています。

学校教育だけでは難しい部分がある一方で、地域だけでも完結しません。今回のお話を通して、子どもの言語と学びを立体的に捉える視点を共有することが、学校と地域をつなぐ共通言語になり得るのではないかと感じました。多様な背景と言語、文化を持つ子どもたちが母語を大切にしながら社会の中で活躍できるよう、学校と地域が協働して何ができるのか、今後も実践の中で考え続けていきたいと思います。

櫻井先生、このたびはお忙しい中、寺子屋で充実した講義をしていただき、ありがとうございました。大変参考になり、今後の日本語授業に活用していただきたいと思います。

今回の講義では、私が「学校現場では、外国人生徒の教育を日本語講師に丸投げする傾向があり、先生たちとうまく連携できない」と質問したところ、「3人の仲間を作ることから始めてはどうか」と、貴重な助言をいただきました。私は、ややもするとオール・オア・ナッシングで考える傾向があるので、まず足場を固めるという助言は大変有益に感じました。

折しも、私が日本語を教えているミャンマー人生徒が、冬休みの体験（旅行）を英語で書いて見せてくれ、それを一緒に日本語に訳していく作業を実践中でした。そこで、その翻訳作業を完成させ、さらに学校の先生への手紙という形に再構成して、その先生に提出したところ、大変評価してもらったと、その生徒から聞きました。「仲間作り」の一歩が踏み出せたのではないかと感じています。

この生徒が書いた作文は、東北に行って雪を見た体験に触れながら母国ミャンマー（赤道に近く高温）との比較をしたり、東北での食事との関連で、ミャンマーでは牛肉を食べない人が多いと紹介したり、単なる旅行報告に留まらない内容を持っていました。同年代の日本人生徒と比較しても、決して劣らない内容だと思います。

また初等教育を英語で受けていたので、上記のような内容を英語で綴ることができます。もちろん英文法の誤りや単語のスペルミスはありますが、平均的な日本人中学生よりも、英語の力は優れていると思います。

このように、作文を書く力から見ても、英語の表現力から見ても、この生徒の言語能力は、決して劣っているわけではありません。そのように豊かな言語能力を持っていることを学校の先生方に向けて顕在化できたことは、貴重な一歩だと考えています。まだ具体的に学校の先生方と連携できているわけではありませんが、生徒の持つ可能性を共有できただけでも意味があったと思います。

なお、ミャンマーやネパール、フィリピンの生徒を見ていて思うのですが、彼ら・彼女らの使う英語でも言語能力の一端は推察できます。でも、もし自分がミャンマー語、ネパール語やタガログ語を十全に使うことができれば、彼ら・彼女らの力をもっと知ることができるのだろうと夢想します。私は初歩のネパール語を学習中ですが、「いろは」の「い」に達したかどうか怪しいところで、ましてミャンマー語やタガログ語に取り組み余裕もありません。それが残念です。

本題に戻り、有益な講義をしていただいたこと、改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。引き続いてのご活躍を祈念しております。

子どものことばの支援について実践的に学ぶ貴重な機会をいただき心から感謝しています。冒頭で櫻井先生が語られた「子どもにとって言語は重い。子どもは言葉がないと生きていけない。大変逼迫している。」という言葉から、子どもの教育現場が抱える切実さを強く感じました。

今回初めて「ことばの力のものさし」で見取る作業に挑戦しました。子どもの現場を持たない私にとっては非常に難しいものでしたが、自分で考えた経験がその後の理解を一気に深めてくれました。このような学習デザインを経験させていただけたことにも非常に感謝しております。

特に心に残ったのは、子どもと成人の日本語教育の根本的な違いです。大人と同じように言語中心の支援を行うことで、子どもを「できない子ども」とラベル付けし、子どもたちのアイデンティティを深く傷つけてしまうということです。つまり、支援の仕方を誤ると、我々が「加害者」になってしまう危険性があるのです。子どもの言語習得において「認知の発達」をどのように支援するかは大きな課題です。行き過ぎたことばの教育をすることの危険性を知ることができて本当によかったです。

6つの理論基盤の中では、Garciaの「トランスランゲージング教育論」、Mollの「バイリンガルZPD」、そして、Cumminsの「リテラシー獲得の教育的枠組み」を教えていただいたことで理解が深まりました。特に櫻井先生が現場に入ったとき、子どものZPDを探しているというお話にはハッとさせられました。これをして「子どもの頭の中をよく見ようとする癖がつく」ということでした。

これらの理論を学んだことで、子どもの持つ全ての言語レパートリーを戦略的に活かすこと。複言語のZPDがどこにあるか見取り、働きかけること。そして読みの世界に入るための足場作りをはじめ、どのように関わっていくのか学ぶことができました。櫻井先生のDLAの動画でも読みの支援の本質を見せていただきました。

今回の講座で最も心を揺さぶられたのは、その櫻井先生とケンさんが対話をするDLAの動画です。アセスメントであることを感じさせない温かい雰囲気の中で、ケンさんが安心して話し、楽しそうに語る姿が印象的でした。櫻井先生の「共感と繰り返し」、「褒めと肯定」による相槌。そして「ちょっと難しい質問をするけど大丈夫?」「もうやめたい?」といった選択権を与えつつ子どもの心を配慮する様子が随所に見られました。子どもが話したくなる場をつくり、子どもの力を育む場にもなるDLAのやりとりに胸が熱くなりました。

講座後、櫻井先生の講座に感銘を受け、すぐに子供支援のサークルに入り、仲間とともに学び始めました。今後はDLAや「ものさし」を適切に使うスキルを磨き、今日の学びを子どもたちのために活かして行きたいと思っています。

櫻井先生、嶋田先生、ありがとうございました。

2026年1月23日の第33回寺子屋ワークショップの参加に際して、有意義で興味深い学びの機会をいただきまして櫻井先生と嶋田先生に心から感謝します。

『多文化多言語の子どもの教育を考える』—「子どもの力のものさし」—を見取りから実践へというタイトルの通り、現在、日本にいる当該条件に当てはまる子どもたちに必要不可欠な見識と具体的な方策が示されていました。2025年の文部科学省のHPで、-義務教育段階から高等学校段階までの外国人児童生徒等のことばの力を包括的に捉え、個に応じた指導・支援のための「評価の枠組み」-を今回のワークショップの復習として改めて確認しました。私は現在、学校のような組織での日本語教育から離れていて英語教育に活動の焦点が当たっているため上記の動きを知りませんでした。しかし、スキャフォルディングやZPD、また言語の臨界期の認識など共通した言語教育の理論的基盤があることに指導の可能性を感じました。

事前課題で例示されたケンという生徒の日本語能力の現立ち位置を、聞く、話す、読む、書くの4技能から分析していく作業において、語彙力や表現、文の構成や表記のしかたなど細かい技能に着目しながら彼にとっての最適な指導法を見取っていくという過程は良いアプローチであると思いました。個々人の言語背景は一つとして同じものはないので、4技能の発達が複雑に絡み合う中で、一つの評価の指標、フォーマットとして教師側が参考にできるでしょう。

何年か前に中学校で外国人生徒数名に取り出し授業したことや高校で日本語の授業を受け持った時のことが思い出されました。現場において、豊かな可能性を秘めた生徒たちが母国ではない土壌にいるがために不適に評価され、その後の人生にnegativeに影響していく予想図が見え、そのことに義憤を強く覚えた鮮明な記憶があります。

今回の示唆の中で、特に合点がいったのはアカデミックな語彙や表現の獲得と運用が大切であるという点です。中学校での取り出し授業をした時、2人の生徒の言語能力と言語以外の能力の発達の相関関係が興味深かったです。一人は生まれてすぐに来日して日本語発話はNativeと変わらないが、アカデミックな（学業成績）が振るわないブラジル人生徒で、もう一人は中学2年生で来日し、日本語がほとんどゼロ状態ではあるが学業成績が非常に優秀な中国人生徒でした。一緒に学びを進めていきながら初めは流暢で発話に問題のないブラジル人が圧倒的な優位にいたのですが、時の経過とともにさまざまな科目の学びが徐々に融合していき、1年経った時には言語の4技能の伸びに大きな逆転が起こっていました。櫻井先生のパワーポイントの中で上記を裏付ける先行研究としてCumminsの提唱した言語能力の3側面を示していました。会話能力流暢度と弁別的言語能力、そして教科学習言語能力です。私が受け持った中学校での取り出し授業の生徒たちと同様、高校でも正規授業として受け持った日本語の授業で、生まれた時から日本にいるペル一人と中学校で来日したベトナム人の生徒がいましたが、同じような言語能力の獲得の軌跡が見受けられました。またアメリカ在住時に勤務していた高校のスペイン語の同僚の先生が言っていたことも思い出されました。彼女いわく家族でアメリカに移住してきて母親は美容院を経営し毎日、アメリカ人に接客しているから会話には全く問題はないが、自分との違いはアメリカの学校、特に高等教育の場に身を置かなかったことであると分析していました。これらの実践を伴った記憶がこの知見を深く納得させてくれました。

8年近くフランスの親子に日本語のオンラインレッスンをしていますが、今回の指標は一つのフォーマットとして、親よりも子のほうに意識的に援用していきたいと考えました。あくまで、それを基に参考にしながら、その対象生徒に対してカスタマイズした具体的な指導法を考え、生み出し、実践していくことが重要であり、今回のワークショップを有意義に自分自身に活かしていく方法であると考えています。

考え深いワークショップに参加できましたことに心からありがとうございます。

第33回アクラスZOOM寺子屋では、多文化・多言語の子どもの教育をテーマに、今年公開された「文化的・言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のことばの発達と習得」に関する内容が取り上げられ、大変示唆に富む学びとなった。特に『ことばの力のものさし』は、子どもの日本語能力を一律に測るのではなく、理解と表出、学習言語と生活言語などを多面的に捉える視点を与えてくれる点が印象的だった。これにより、教師が「できない」と判断してしまいがちな場面でも、子どもが既にもっている力や伸びつつある力に目を向けることができる。支援や指導を考える際の共通言語として活用することで、子ども一人ひとりに寄り添った教育につながる可能性を感じた。